

Prince Harry, *SPARE*を広告文的表現技法の視点から読む

キーワード: 広告文 / 文体 / 接続詞独立節 / words in fragments

金子輝美

0. はじめに

英国のハリー王子 (Prince Harry) によって書かれた回顧録 (memoirs) *SPARE* ではどのような英語が使われているのだろうか。英国の標準的現代英語に触れることができるのではないだろうか。そのような思いで本書を開いたのは、出版されて数日後の 2023 年1月のことであった。本書の内容やハリー王子夫妻の動向については、テレビ番組や雑誌などで繰り返し報道され、評論家たちや一般大衆の話題にされてきた。英国王室評論家の多賀幹子氏がテレビ番組で *spare/heir* の意味と音声に触れたことがあったが、当然のことながら、本書の英語表現そのものにコメントする人はいなかった。ここでは、英語表現の特徴を観察し、若干の考察を加えることにする。王子の私生活や主張について論評することは、本稿の主要な目的ではない。

本書によれば、周囲は王子のことを Prince Harry と呼び、本人も Harry と自称しているので、ここではそれに従うことにする。父や兄は Harold と呼びかけている。なお、現在は、日本の TV 報道番組などではヘンリー王子と呼ぶことが多い。洗礼名は Henry Charles Albert David of Wales であると自己紹介している (Part 1. Chapter 2, p.14)。

本書は3部 (Three Parts) から成る。第1部 (pp.11-116) では、1997 年、母親のダイアナ妃 (Princess Diana) の突然の自動車事故死を知らされた王子の悲痛な心境が語られる。父母と兄 (William, 王子は Willy と呼ぶ) と楽しく過ごしてきた幸せな日々は、一瞬にして過去のものとなった。第2部 (pp.117-264) では、成人した王子が、アフリカ大陸で野生動物と過ごしたこと、北極大陸の探検隊に随行したこと、英国軍隊に入隊し、他の隊員と同じように厳しい訓練を受けたこと、アフガニスタンでヘリコプターを操縦しながら、タリバン兵を銃撃したことなどが語られる。自分の殺人行為を認めたこと、それをビデオ・ゲームの殺人行為に喩えたことなどが物議をかもしることになった (Apparently I'd caused quite a stir by admitting that I'd killed people. In a war. - Part 2. Chapter 58, p.220)。危険に身をさらすことを危惧する周囲の声もあったが、空軍の兵士として、忠実に任務を完遂する自己の姿に焦点を当てて描かれている。第3部 (pp.265-407) では、メーガン (Megan) との出会いと結婚、兄との確執、アメリカ合衆国カリフォルニア州への移住の理由などが熱っぽく語られる。通読して印象に残るのは、亡き母を慕う心の灯を今も消すことなく生き続ける王子の孤独な姿である。読者に親しく話しかける簡潔な文章には、独自の表現技法が散見される。

I . Prince Harry, *SPARE* の文体を読む

文体 (style) という言葉は、文体論 (stylistics) の専攻者は別にして、私たちの周辺では、特に深い意味を意識せずに使われているようである。例えば、ヘミングウェイの文体は平易なので読みやすいというように使われる。英語教育の研究会などでは、文体という語がこのように使われても、非難されるべきことではない。会員たちの意思伝達が、支障なく、円滑になされているならば、文体の厳密な定義を求める必要はない。

文体という用語も、文体論という研究分野も、外見上は、魅力的に感じられることは事実である。日本における文体研究の歴史は決して新しいものではない。海外の流れを受けて、1961年に設立された日本文体論学会は、年次研究大会を重ね、機関誌『文体論研究』を発行してきた。会員構成は、文学と語学の研究者が中心を占め、日本語と英語を対象とする研究者が圧倒的に多いという特徴がある。私はこの学会に所属したことはないが、会員の減少傾向が続いていると聞く。最初に私が感じたことは、文体という研究対象はあまりにも漠然としており、掴みどころがないということであった。詳しいことは解らないが、文体の定義にしても、さまざまな見解が提出され、研究者間で共通理解が得られないことが多かったようだ。

文学作品でも、随筆でも、新聞記事でも同じことだが、言語表現を論ずるには、まず対象となるテキストを精読しなければならない。テキストを読むことは、文体を読むことでもある。

この回顧録の冒頭近くの英文を読んでみよう。ハリー王子はプログモア・ガーデン (Progmore Garden) で親族と会うことになっていた。彼は約束の時間に到着したが、まだ誰も来ていなかった。

(1) The weather was quintessentially April. Not quite winter, not yet spring. The trees were bare, but tulips were popping. The light was pale, but the indigo lake, threading through the gardens, glowed.

How beautiful it all is, I thought. And also how sad. (Prologue, p.1)

簡潔で美しい風景描写である。1行目に *quintessentially* という長い多音節語が使われていることに注目したい。この文を例えば *typical* や *perfect* を使って、The weather was a typical example of April. あるいは It was just a perfect day you could call April. と表現するとしたら、説明的過ぎて、後続する2文との調和が薄れてしまう。「典型的に」という意味に相当する *quintessentially* には、その語でなければ表せない特有のニュアンスがあるのだろう。この副詞は他の箇所でも使われている。ある中年男性が颯爽とスキーで滑走する姿を、I recalled him skiing in a Barbour jacket, so quintessentially aristocratic. (Part 2. Chapter 14, p.142) と活写している。このような多音節語の使用は、私の直感であるが、豊富な語彙を有する著者の趣向なのかも知れない。それにしても *quintessentially* は、*aristocratic* という形容詞に意味的によく適合しているように感じられる。

本論に戻りたい。2行目の *tulips were popping* は、日常生活で使われる *pop* という語が比喩的に使われている。2行目の *The light was pale, but the indigo lake, threading through the gardens,*

glowed. は引き締まった表現である。but 以下を the indigo lake threaded through the garden and glowed. とすると、あまりにも散文的 (prosaic) になってしまう。引用 (1) の最後の独立行は、風景描写ではなくて、風景によって触発された王子の心情を表出している。And also how sad. は、it is が省略された不完全文である。話しことばの特徴が具現されているが、「その時」、「その場」で、実際に心に浮かんだ言葉ではない。これら2文の独立行はあくまで追憶であり、現在、すなわち執筆時における王子の内的独白である。その場で話されたことの録音を、そのまま文字化しない限り、話しことばで書かれた文章はあり得ない。話しことばは、現実の場面と時間から離れられないという制約を受けている。口語表現に擬した表現であるが、真の口語ではない。

母親のダイアナ妃の突然の事故死を知らされた 12 歳の王子の悲しみと周囲の様子は、どのように描かれているのだろうか (以下、英文と和文の下線はすべて本稿執筆者による)。

- (2) (…). I could see nothing but a matrix of coloured dots. Flowers. And more flowers. I could hear nothing but a rhythmic clicking from across the road. The press. I reached for my father's hand, for comfort, and then cursed myself, because that gesture set off an explosion of clicks.

I'd given them exactly what they wanted. Emotion. Drama. Pain.

They fired and fired and fired. (Part 1. Chapter 4, p.20)

- (3) *Soon, soon, she'll send for me and Willy. It's so obvious! Why didn't I see it before? Mummy isn't dead! She's hiding.*

I felt so much better.

The doubt crept in. (Part 1. Chapter 1, p.21)

(2) を見てみよう。王室関係者に訃報が伝えられてから、わずか数時間後、居城の近くには、すでに弔問の人々が集まっていた。あたりは色とりどりの供花の束で埋め尽くされていた。報道関係者がカメラのシャッターを押す音が聞こえた。不安になった私は、手を伸ばして父の手を握った。その瞬間、一斉にカメラが私に向けられた。これは私の失敗だった。私はマスコミの格好の餌食にされたのだ。The Press. というように、終止符で区切ったのは、報道関係者の存在を強調するためであろう。(2) の最後の独立した2行は、さらにマスコミの取材攻勢の激しさを表現している。Emotion. Drama. Pain. というように、3語を終止符で区切って独立 (孤立) させているのは、王子の心に渦巻く激情をこれら3語に要約して表現したものである。このような大人の現実的世界と純粋な少年少女たちの理想の世界の対立は、人間社会に見られる普遍的な構図である。(3) の斜体字の部分は、王子の心の叫びを表す独白である。このような斜体字で意識の流れを表出することは、小説などでよく見られる手法である。最後に配置された独立2行は、現実と仮想の間で揺れ動く王子の心境を強調している。

(2) (3) の独立行は、すでに述べたように、一種の強調表現である。本書には他にも数種の強調表現が見られるが、ここでは、1語だけ独立して新しい行で用いられる場合 (4) と、1語だけ同じ行で、独立して使われる場合 (5) の実例を示すことにする。

(4) a. (…). But I do have pure, indisputable memory of the song climaxing and my eyes starting to sting and tears nearly falling.

Nearly. (Part 1. Chapter 6, p.24)

b. (…). I didn't want to hear any more talk of protocols, tradition, strategy. Enough, I thought.

Enough. (Part 3. Chapter 61, p.366)

(5) a. Of course I *had* been doing some cocaine around this time. At someone's country house, during the shooting weekend. I'd been offered a line, and I'd done a few more since. It wasn't much fun, and it didn't make me particularly happy, as if it seemed to make everyone around me, but it made me feel different, and that was the main goal. Feel. Different. I was a deeply unhappy seventeen-year-old boy willing to try almost anything that would alter the status quo. (Part 1. Chapter 36, pp.76-77)

b. I was sitting on the sofa, he was standing over me. I remember saying: *You need to hear me out, Willy*.

He wouldn't. He simply would not listen.

To be fair, he felt the same about me.

He called me names. All kinds of names. He said I refused to take responsibility for what was happening. He said I didn't care about my office and the people who worked with me. (Part 3. Chapter 62, p.258)

下線を付したように、(4a) では Nearly が、(4b) では Enough が、それぞれ独立行で繰り返されている。(5a) は学友たちとコカインを吸引した時の感想である。もちろん、この行為は許されることではないが、王子は敢えてこの挿話を用いることによって、読者の関心を得ようとしているようだ。先行する *feel different* を、*Feel. Different.* と、動詞とその補部を終止符で区切って独立させて反復している。このように区切られた語は、私にはいかにも斧で切断されたように感じられるので、「反復の小間切れ語」(repeated words in fragments) と呼びたい。(5b) では、兄のウイリアム王子と激しく口論した時のことを語っている。「兄は私を罵倒した」(He called me names.) だけで、状況を伝えることはできるが、さらに「ありとあらゆる罵り言葉で」(All kinds of names.) と念を押している。

本書は思い出の記であるが、日記ではない。だから、執筆時の著者の感情や解釈を完全には排除することはできない。次例 (6) (7) は、南仏のサントロペで母と兄と三人で楽しく過ごした少年時代の思い出である。当時、ハリー王子 (1984 年9月生まれ) は 12 歳、兄ウイリアム王子 (1982 年6月生まれ) は 15 歳の少年であった。彼等は冒険好きで、ジェットスキーで禁止海域まで出て周囲を心配させる。母はいつも皆が「友達」(Friend) と呼ぶ男性と一緒にいた。王子はこの男性を「素敵な男の人」(Nice enough bloke) であると記している。

(6) a. Whenever Mummy was, I understood that she was with her new *friend*. That was the word everyone used. Not boyfriend, not lover. Friend. Nice enough bloke, I thought. Willy and I had just met him. Actually, we'd been with Mummy weeks earlier when *she* first met him, in St Tropez. We were having a grand time, just the three of us, staying at some old gent's villa. There was much laughter, horseplay, the norm whenever Mummy and Willy and I were together, though even more so on that holiday. Everything about that trip to St Tropez was heaven. The weather was sublime, the food was tasty, Mummy was smiling.

Best of all, there were jet skis. (Part 1. Chapter 1, p.12)

b. Was it after we got back from that jet-ski misadventure that Mummy's friend first appeared? No more likely it was just before. *Hello there, you must be Harry*. Raven hair, leathery tan, bone-white smile. *How are you today? My name is blah, blah*. He chatted us up, chatted Mummy up. Specifically Mummy. Pointedly Mummy. (…). He was cheeky, no doubt. But again, nice enough. He gave Mummy a present. Diamond bracelet. She seemed to like it. She wore it a lot. Then he faded from (…).

As long as Mummy's happy, I told Willy, who said he felt the same. (*ibid.*)

(6a) の4行目の *We were having a grand time, just the three of us*. は、本来の口語の特徴を宿している。Swan (1855: 525) は、*They're very polite, your children*. を挙げて、口語における「強意のタグ用法」(reinforcement tags) として扱っていた。だが 2016 年の全面改訂第4版には、この例文も説明も見られない。現在ではこの用法は、口語の特徴とは言えなくなっているのだろう。書き言葉から話し言葉へという方向性は、これまでも指摘されている、なお、この日の天候は *sublime* という語で表現されている。この語は、英国ロマン派文学では、大自然の崇高さを示すものであった。神が親子三人のために用意してくれたような美しい夏の日であったと解釈することもできるだろう。

(6b) の *He chatted us up, chatted Mummy up*. の *chat up* の含意は、「なれなれしく話しかける、取り入る、口説く」という日本語に相当すると解される。当時 12 歳のハリー王子は、この男性をこのように観察していたというよりは、後年、本書執筆時に改めて思い出してこのように描写しているのではなかろうか。回想録であるから、執筆時の判断が混入することは避けられない。*He was cheeky, no doubt. / But again, nice enough*. などにも、同じことが言えるであろう。

王子は大学で美術史を専攻したいと思ったこともあったが、進学しなかった。王位継承者はそんなに頑張らなくてもよいと、父自身が周囲から教え込まれていたのも、「父は兄の *spare* である私の進学を望まなかったし、私も4年間文献を読んで過ごす自分の姿を想像することはできなかった」(*He wanted that for me. That was why he didn't press me to go to University. / But I couldn't just picture myself spending years bending on a book. - Part 1. Chapter 38, pp.79-80*) と記している。この記述に接すると、王子は読書や文筆を好まないタイプの人物だと速断してしまうが、本書を通読して判断する限り、決してそのような人物ではない。王子の文章は、繊細な知性で貫かれており、溪谷の清冽な流れにも似た快速調である。また語彙も非常に豊富である。

II. Because, As if, Though, While, When, Until 節の独立用法

本書には、著者独自の表現技法がいくつか見られるが、ここでは、本章の表題に掲げた接続詞の独立用法に焦点を絞って説明したい。

Because 独立節は口語ではよく使われるが、書きことばで使われるのは望ましくないとされる。Pinker (2014: 204) は、皮肉を交えて、次のような表現は ungrammatical であると記している。

(7) Many children are taught that it is ungrammatical to begin a sentence with a conjunction (what I have been calling a coordinator). Because they sometimes write in fragments.

王子の回顧録には Because 独立節 (Why に呼応する例は対象外とする) は6例確認できるが、ここでは1例だけ示したい。

(8) (…). Many paps wanted a reaction , a tussle, but what Tweedle Dump and Tweedle Dumper seemed to want was a fight to the death. Blinded, I'd fantasize about punching them. Then I'd take deep breaths, remind myself: Don't do it. That's just what they want. So they can sue and become famous.

Because, in the end, I decided *that* was their game. That was what it was all about: two fellas who weren't famous, thinking it must be fabulous to be famous, trying to become famous by attacking and ruining the life of someone famous. (Part 2. Chapter 47, p.199)

積極的に取材攻勢をかけてくる報道関係者を王子は paps と呼んでいる。挑発に乗ってはならない。名を売りたいという彼等が望んでいる結果になると王子は自戒している。(8) の Because は、意味も機能も、So あるいは That's why に近似している。「そんな理由(わけ)で、結局は、そのような取材攻勢は彼等が生きるための手段 (*that was their game*) である」と王子は断定している。「そんな理由(わけ)」とは、先行文脈で語られていることである。

興味深いことに、Because 独立節は、*OED* 元編集長 Simpson (2016) の随想的回顧録でも3回使われている。1例だけ引いておきたい。

(9) What the archives don't contain — and when you have no hope of appreciating unless you come at things from another angle — is the fun and excitement of historical dictionary work. If you need to, step back a few paces and draw a deep breath. This excitement derives equally from the detective work involved, from recovering information which has been lost for maybe hundreds of years (…), and from seeing exactly how words arise out of the culture and society in which they are used. Because words do tell us about people and cultures that use them.

(Simpson 2016: Introduction)

これは明らかに会話調の文章ではない。Because 独立節は、複数の先行文のどの部分との因果関係を説明しているのだろうか。単純に解釈すれば、直前の how words arise from the culture and society in which they are used という部分を説明していると考えるのが自然である。

先述のピンカーは、標準英語において Because 独立用法が可能になるのは、条件 (10) に適合する場合であることを指摘し、その具体例として (11) を示している。

(10) It can also be implicit in a series of related assertions that call for a single explanation, which the author then provides, as in Aleksandr Solzhenitsyn's reflection on the twentieth-century's genocidal tyrants. (Pinker 2014: 205)

(11) Macbeth's self-justifications were feeble — and his conscience devoured him. Yes, even Iago was a little lamb, too. The imagination and spiritual strength of Shakespeare's evil-doers stopped short at a dozen corpses. Because they had no ideology. (*ibid.*)

Because 独立節がなぜ可能なのかについての説明 (10) を見てみよう。相互に関連する一連の主張 (a series of related assertions) が、単一の説明 (a single explanation) を求める場合には、このような Because 独立節の使用は可能である (It can be implicit …)。次に、(11) の文意を確認したい。「マクベスの自己正当化の度合いは薄弱であった。だから、自分の良心の呵責に負けてしまった」、「イアゴもまた子羊のような小心者だった」、「シェイクスピアの他の悪人どもは想像力も精神的強さもあつたはずであるが、十数体の死体を前にして佇ちすくんでしまった」のである。結局、彼等は極悪人になり切れなかった。それはなぜだったのか。それを総合的に説明するのが Because 独立節である。どの登場人物にも、同じように、信念 (ideology) がなかったからである。

ところで、Because 独立節の用法に関するピンカーの説明 (10) は、(11) には適合するが、(9) には適合しない。(9) の文意と Because 独立節の因果関係をどのように解釈するかによって、異なる答えが可能であると思うが、私の解釈では、(9) はピンカーが指摘する (10) の制約を受けているとは思えない。このような点で、ピンカーの説明には若干問題があると言わなければならない。

本稿は話しことばを真正面に据えて追求することを目的としないが、話しことばにおける典型的な Because 独立節を1例だけ加えておきたい。

(12) Well, she liked the way I took command. I said, “Jasnine, baby, I'm gonna kiss you.”
Because you know what women like, don't you? (…).

(NHK TV 講座『ドラマで楽しむ英会話』 *Miami* 7. 2007年3月号)

男の子たち3人が、アルバイト先のマイアミのホテルで朝食をしている。昨夜ジャスニンとデートしたポールは、2人の質問に、「彼女は俺の言う通りにすることに抵抗はなかった」、「だって、女の子って、男の子に命令されることが好きなんだから」と得意げに答えている。この Because 節は先行文との明確な因果関係を示しているというよりは、むしろ単なる付随的説明に過ぎない。

次に As if, Though, While, When, Until 独立節の実例 (13)-(18) を各1例ずつ示すことにする。

- (13) Willy and I walked up and down the crowds outside Kensington Palace, smiling, shaking hands. As if we were running for office. Hundreds and hundreds of hands were thrust continually into our faces, the fingers wet. (Part 1. Chapter 6, p.22)

母親の葬儀終了後、兄とハリー王子は努めて明るく微笑みながら、弔問客の間を急ぎ足で通り抜けた。数百数千の群衆の涙で濡れた手が顔面に突き刺さってくるようだった。Because, As ifなどの接続詞節を独立させるのはなぜであろうか。1つの理由として考えられるのは、複文になるのを避けて、出来事や思いを直線的に継ぎ足して記述するためである。原初的な文構成、すなわち並列構文 (parataxis) への志向性が根底にあると考えることもできる。

- (14) We sat around talking, listened to music. Lively group. When the party broke up, when everybody cleared out, I gave Florence a lift home. That was her name. Florence. Though everyone called her Flee.
She lived in Notting Hill, she said. When we pulled up outside her flat she invited me up for a cup of tea. Sure, I said. (Part 2. Chapter 44, p.190)

想い出されることを少しずつ継ぎ足して表現している。Though は、本来、従属接続詞であるが、ここでは等位接続詞化している。意味も機能も But に近似していることに注目したい。なお、砕けた会話では、Everyone called her Flee, though. という表現が可能であるように、though は副詞に転化することもある。しかし、類義語である although にはこのような用法はない。

Though 独立節は、先述の OED 編集長シンプソンの随想にも1例だけ見出される。

- (15) When we advertise for editorial posts, we have to be very careful not to open the net too wide. We did once, in the early days, and received over a thousand applications for three jobs. (…). (…). And yet these are the last people we need working on dictionaries. In my humble opinion. Though there are doubtless others who beg to differ. (Simpson 2016: 243)

OED 編集委員の欠員を補うために、3部門にわたって公募したことがあった。千人以上の応募があったが、辞典編集者として採用したい応募者はほとんどいなかった。In my humble opinion. (敢えて卑見を申し上げるならば) という句を独立させていることにも、著者の口語的表現への志向を見る思いがする。この独立句に呼応するかのよう、Though 独立節が後続している。堅苦しい表現から平易な口語的表現へという変化の方向性が、現代英語の書きことばにも見られるのである。

本論の SPARE の文体観察に戻ろう。While の独立用法の実例 (16) に注目されたい。

(16) From Shawbury I moved on to Middle Wallop. I now knew how to fly a helicopter, the Army conceded, but next I needed to learn how to fly one more tactically. While doing other things. Many other things. Like reading a map, and locating a target and firing missiles and talking on the radios and peeing into a bag. (Patr 2. Chapter 32, p.168)

地図を読み、標的を定めて銃撃するなど、多くのことをしながら、ヘリコプターを操縦する技術が求められる。While 以下の具体的な行為とヘリコプター操縦という行為は同時進行である。接続詞 while は、2つの節の意味を対照的に際立たせるために使われることが多い。(16) で著者が強調したかったことは、While 以下のさまざまな用務であろう。

次に When 独立節の実例を引く。

(17) I sat down with Pa that summer at Balmoral, (…). He'd moved in shortly after Gan-Gan's death. And wherever he lived, I lived.

When I wasn't at Manor House. (Part 1. Chapter 38, p.78)

「私はいつも父と同居していた」のだが、それはWhen 独立節が説明しているように、王子が Manor House にいない時のことであった。改行して When 節を独立させているのは、この部分を際立たせることによって、著者の意図を強調するためである。Until 独立節についても同じことが言える。

(18) I was excited to welcome Meg to my home, but also embarrassed: Nott Cott was no palace. Nott Cott was palace adjunct - that was the best you could say for it. I watched her as she walked up the front path, the white picket fence. To my relief she made no sign of dismay, gave no indication of disillusionment.

Until she got inside: Then she said something about a frat house.

I glanced around. She wasn't far off. (Part 3. Chapter 12, p.287)

婚約者のメーガン (Megan) を初めて離宮 (palace adjunct) へ招待した時の描写である。(17) の When 独立節と同じように、(18) では改行して Until 独立節を用いることによって、彼女の発言の瞬間が強調されている。彼女が城内に一步足を踏み入ると、彼女はやっと思感を口にしたのだ。

ここまで観察してきた Because, As if, Though (Although は実例がない), While, When, Until 独立節の形式特徴の1つとして、追加陳述 (追述、after-thought) という言語現象を挙げることができる。情報構造としては、本来は ground (地) であった従属節が figure (図) に格上げされ、焦点が当てられるようになった。また見方を変えれば、すでに述べたように、本来の従属節を独立させたことによって、素朴で直線的な単文の並列 (parataxis) という現象を生じさせることになった。

Because 独立節が ungrammatical であると先述のピンカーが断じるのはなぜだろうか。彼は先述の自著 *The Sense of Style* の序文の冒頭で、“I love style manuals. Ever since I was assigned

Strunk and White's *The Elements of Style* in an introductory psychology course, the writing guide has been among my favorite literary genres.”と述べている。第4版（1999）まで版を重ねたこの教本は、正統な言語表現を擁護する規範主義の立場から書かれている。接続詞の独立節用法には言及がないが、この教本の著者たちにとっては、絶対に許容できない表現であろう。一方、ピンカーはハーバード大学で心理学を教えているが、理論言語学・認知科学など幅広い分野で活躍している。その文章は重厚で整然としている。伝統的アカデミズムに連なる規範主義者であり、文体にも興味を抱いていることを著書から知ることができる。概して、このような学派の学者は、生きた自然言語の中に現実に生起する多様な言語現象には眼を背けることになる。*SPARE*の今風の表現は、伝統的規範とはあまりにも遠い位置にあるので、looseとかawkwardに感じられることだろう。

III. 英語広告文との比較

私たちが住む現代資本主義社会は、多種多様の広告がひしめき合っている。高い広告料を払って広告を出しても、各企業は採算が取れるのである。

一般の消費者たちは、多くの広告に受け身で接し、諸条件を比較検討してから、購入の可否を決めればよい。もちろん誇大広告は禁じられているが、巧みな謳い文句に魅せられる消費者もいるはずだ。しかし広告主の意図や魂胆にまで思いを馳せる消費者は少ない。消費者たちは、水が低きに流れるように、素直に安易な方向へ流れる傾向があることは否定できない。一方、販売する側の企業経営者や広告会社は、消費者は何を求めているのか、どのような広告文を書けばよいのか、頭を悩ますことになる。出版界も競争が熾烈である。例えば、「この本は最近ずっとベスト・セラーになっている」というような実績や著名人の賛辞などが何よりの宣伝になる。

世界的なキャッシュレス時代を迎え、私たちの生活様式や考え方も激変している。ここでは、国際的カード会社 VISA ACCEPTANCE が、英国の経済雑誌に載せたごく最近の広告を見てみよう。白地に OPEN FOR BUSINESS という青い大文字が浮かぶ。下方には VisaAcceptance.com という青い文字の社名が見える。これら以外の文字は、すべて黒色で統一されている。スマホを持つモデルの女性は白人優位の社会ではないことを宣言しているようだ。

広告文の語彙と形式を見てみよう。Open という語が5回使用されている。この語がこの広告文のキーワードになっている。特に印象的な表現形式は、**Open is flexible. Open is possible. Open is the future.** という太文字の短文が縦に配置されていることである。形容詞 open が主語の位置に置かれていることも新鮮である。このような独立節の連用は、*SPARE* にも見られる形式である。難解な語彙や複雑な構文は見られない。いかに読者の視角に訴えるのか、ということが求められるのだ。

*SPARE*の文章は、現代社会で大きな役割を果たしている広告文の影響を受けている。編集者は元来、ジャーナリストとしての矜持も理想も倫理観も持っているはずである。だが、現実には営利に走らざるを得ないことが多い。活字離れが進む現代社会では、編集者と著者は刺激的なタイトルを案出し、著者は一般読者の願望と感覚に迎合する内容を平易な文体で書かなければならない。

<出典> FORTUNE (April/May, 2023)

Visa Acceptance Solutions

Payments is **OPEN FOR BUSINESS**

Build the experiences consumers want on the world's open payments platform. We can shape the future of payments together.

Open is flexible.

Open is possible.

Open is the future.

[VisaAcceptance.com](https://www.visaacceptance.com)

VISA



IV. Patterson & Mooney (2022), *Diana, William and Harry*

上掲の作品には、ハリー王子の *SPARE* に酷似する文章構成が散見される。著者の1人であるパターソンは、情報欄では、**James Patterson** is one of the best-known and biggest-selling writers of all time. His books have sold in excess of 400 million copies worldwide. (…). He lives in Florida with his family. と紹介されている。共著者ムーニーについては、**Chris Mooney** is the international best-selling author of fourteen thrillers. The Mystery Writers of America nominated *Remembering Sarah* for an Edgar Award. He teaches creative writing at Harvard. という短い紹介がある。

この著書は9 Parts から成り、時間軸に沿って、通算 124 章 (Chapters 1-124) が収められている。1997 年のダイアナ妃の自動車事故死 (Prologue, pp.1-3) という悲劇から始まり、第 124 章 (2021 年の夏の出来事) を経て、終章 (Epilogue, pp.392-394) で閉じられる。

これら2人の著者については、私は全く何も知らなかった。あくまで推測だが、王室の内情に精通しているということは、一部の王室関係者と信頼関係で結ばれていることを意味する。王室にとっては、都合の良い、いわば与党の作家たちなのであろう。どのような表現技法が用いられているのだろうか。1例だけ引いておく。

(19) ‘I’m going to air tomorrow night, and I didn’t want it to catch you by surprise,’ she tells him. ‘Don’t worry. Everything will be fine – I promise,’ she says before heading off.

She couldn’t be more wrong.

Thirteen-year-old William is ‘filled with dread’ as he sits down to watch the program the next night in the privacy of his headmaster’s study. The interview is so much worse than he could’ve imagined. His mother publicly discusses her bouts of depression and self-harm. She’s openly dismissive of the monarchy, and she admits to infidelity on both her part and his father’s.

William is horrified.

Absolutely mortified.

And angry. (Patterson & Mooney, *Diana, William and Harry*. Chapter 50, p.147)

1995 年 11 月 19 日に録画したダイアナ妃出演の BBC テレビ番組 *Panorama Interview* が、翌日夜、放映されることになったので、視聴するように彼女はウイリアム王子に告げた(最初の2行)。番組を見た王子の驚愕は尋常なものではなかった。出演した彼女の発言は、まさに最悪だったのだ (She couldn’t be more wrong.)。最後の独立3行は、王子の驚き・恐怖・怒りを強調している。*SPARE* にも同じ形式の独立行が多く見られることを、ここでは指摘するだけに留めたい。

なお、彼女の問題発言について、ネット上で検索してみると、BBC テレビの担当記者の側に大きな問題があり、「誠実さと透明性が基準に達していなかった」ことを BBC は認め、ウイリアム王子など王室関係者に謝罪文を送ったと記されている。真相は果たしてどうだったのだろうか。

V. おわりに

ハリー王子は名門校として知られるイートン (Eton) で教育を受けたのだから、本書は格調高い英語で書かれていると予想したが、それは私の幻想に過ぎなかった。

資本主義社会は自由競争という原理に基づいて発達してきた。書籍の出版に関しても、どのような内容をどのように書けば読者を惹きつけることができるのかということに、出版社も著者も無関心ではられない。余談になるが、約 250 年前、英国の言語アカデミーの最盛期を生きたスウィフト (Jonathan Swift: 1667-1745) とジョンソン (Samuel Johnson: 1709-1784) が、もしハリー王子の英語表現を見たら、さぞかし悲憤慷慨することであろう。

本書を通読して浮かび上がる王子の実像は、自分の意志に従って自由奔放に行動せずにはいられない積極的な性格の男性である。謹厳実直・隠忍自重・長幼の序という古い価値観に従順するタイプではない。束縛から解放されたいという渴望は非常に強い。だから、王室の伝統と因習の中に埋没して、*spare* として平穏無事な生活に徹することはできなかったのである。

本書はなじみの薄い表現が多いので、読み進むのに時間を要した。英和辞書を引けば解決するという単純な問題ではない。だが、王子の一貫した軽やかな筆致を、難渋しながらも、最後まで自分の眼で追うことができた。巻末の謝辞の最終2行で王子は、“And to you, the reader: Thank you for wanting to know my story in my words. I am so grateful to be able to share it thus far.” と結んでいる。*my story in my words* は、ここでは字句通りに解釈しておきたい。

本書は話しことばに擬した簡潔な表現を採用しており、例示したように、独立語句や独立行など、読者の視角に訴えようとする広告文的な強意表現が処々に見られることが大きな特徴である。

研究対象図書

Prince Harry (2023), *SPARE*. Penguin House UK.

Patterson, James and Chris Mooney (2022), *Diana, William and Harry*. Penguin Books.

主要参考文献

大森裕實 (2016) 「バルニバービ言語研究所の意味—言語史における J.スウィフトと S.ジョンソン—」

『言語研究と英語教育』第 11 号、1-22. 中部応用言語学研究会.

金子輝美 (2019) 「Because 独立節—OED 編集長の著書に見られる実例を中心に—」『英語語法文法学会第 27 回大会予稿集』(口頭発表、北九州市立大学北方校舎、2019 年 10 月 19 日)

澤田茂保 (2016) 『ことばの実際1: 話しことばの構造』研究社.

Simpson, John (2016) *The Word Detective*. Abacus.

Strunk, William and E. B. White (1979³) *The Elements of Style*. Macmillan.

Swan, Michael (1980 / 2016⁴ Fully Devised) *Practical English Usage*. Oxford University Press.

Pinker, Steven (2014) *The Sense of Style*. Allen Lane (Penguin Books)